

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名：農学部/助教

氏 名：奥山 洋一郎

授業科目名	国際森林論
研修先 (大学・国・都市名)	ロッテンブルク林業大学(ドイツ連邦共和国・ロッテンブルク)
研修期間	令和 5年 9月 15日 ~ 令和 5年 9月 28日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>世界の農林業のうち、持続可能な木材生産は先進国で行われている。中でも環境に配慮した先導的な取組で有名なドイツの森林・林業・森林利用を見学することにより、森林・林業および森林観の多様性を学び、異文化を理解する素養および国際的視野を涵養する。本研修の対象は、主に森林林業に関心のある農学部4年生であり、地域の森林管理の中心となる森林・林業技術者になることを目的とした森林科学コースに所属する学生である。ドイツは、地域の森林管理に責任をもつフォレスターが活動する先進地域であり、先進事例を知ること、国際的な視野で地域の農林業に貢献できる人材の養成に資することが期待される。研修には、森林環境教育、技術者育成、フォレスターの役割と森林観、国際商品としての木材製品加工、地域活性化に向けた林産物生産、森林資源把握技術、林業のICT化、地域連携といった内容を含めている。</p>	
<p>〔研修の成果〕 *事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>事前学習として、ドイツ全般に関する情報提供を行い、ドイツでの生活や携行品、安全な旅行・滞在に関する留意事項をしっかりと確認した。国際情勢が流動化する中で、安全確保については同行する他大学教員と事前の打ち合わせ、確認を徹底した。</p> <p>学習成果として、日本と異なる植生、社会環境のドイツにおける森林管理の現状を幅広い視点から学ぶことができて、今後の卒業研究や就職後の業務において日本の状況を相対化しながら、俯瞰する視座を得られた。また、現地で英語での講義、実習を受けることで、各自の限界を知ることになり、語学能力の獲得や国際交流の経験の必要性についても体感することになった。今後の学生の学ぶ姿勢に良い影響を与えたことが期待できる。また、短期間とは言え、海外の生活を体験することで、自分自身で判断することの重要性、日本では想定できない危険を回避すること、現地での人との交流から得られた様々なサポートに感謝することで、単なる科目の学習を超えた成長も感じられた。研修地では、他大学生と共同生活をする中で、新たな人的交流の獲得や他者と協力することを学ぶ機会となった。</p> <p>今回の研修の実施にあたり、為替の変動や世界的な物価高による学生の経済的負担の増加が懸念された。大学からの学生渡航費の支援により経済負担が軽減されたことで、参加を決断できた学生も複数存在した。関係各位のご助力に感謝申し上げたい。</p> <p>なお、研修期間中(9月19日)にロッテンブルク林業大学のカイザー学長を表敬訪問して、ダブルディグリーブプログラムの開設等により、本学との学術交流をさらに推進していくことの必要性が確認された。今回の学生研修の成功を学内関係者に共有して、両大学の交流の深化につなげていきたい。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>(1)体調不良者へのサポート体制 現地では体調管理、異常時の申告を学生に指示したが、結果として3名の学生が発熱等により一時的に宿舎で休養する事態となった。ドイツ国内も異常気象の影響で、例年よりも気温が高く、寒暖差が大きく体調を崩す一因となった。また、新型コロナウイルス流行により、無理をせずに発熱時に申告する、休養するという行動が学生にも徹底されていた、ということもあろう。今回は宿泊経験のある施設であり、休養時のバックアップ、食事の手配はスムーズに実施できた。また、薬や体温計については教員が持参した私物で対応できたが、同行した他大学は非常時の対応キットを大学として持参してきていた。この点は改善点としたい。</p> <p>(2)学生の語学能力 同行した岩手大学は大学院生が参加したが、本学は学部4年生が中心で、語学能力や専門知識が不足して、現地での講義、解説に対応できない場面が散見された。事前学習の取り組みを工夫すること、参加者の動機づけをしっかりとすることが必要と認識した。</p>	